

【ポスター発表】

高齢犬を介護する飼育者の負担感と対処方法

○ 東京農工大学 氏名 甲田菜穂子 (005914)

キーワード：高齢犬 介護負担 対処方法

1. 研究目的

近年、ペットを家族の一員と思う飼育者が増え、飼育の質が向上している。それに伴い、ペットの寿命が延び、国内では40%の人が高齢ペットを飼育している。日本では、イヌとネコがペットの大部分を占め、特にイヌはネコと比較して、動物病院の費用や年間利用頻度が多く、飼育者の負担が大きいと考えられる。イヌの高齢化に伴う飼い主の負担として、イヌの介護問題もある。イヌを含めたペットは、家族化、子ども化されることから、高齢者や障害児の介護と類似して捉えられると考えられる。

高齢者や障害児の介護負担感の研究では、介護負担感の要因だけでなく、介護負担への対処方法についても調査が実施されている。しかし、高齢犬の介護では、介護負担感やその対処方法は、まだほとんど明らかにされていない。本研究は、質問紙調査を行ない、高齢犬飼育者の介護負担感とその対処方法について明らかにすることを目的とした。

2. 研究の視点および方法

質問紙を縁故法により、介護の必要な高齢犬の主たる飼育者52名に配布し、48名分の回答を得た（回収率92%）。調査項目は、イヌの基本生活動作、認知機能、介護負担感、介護負担への対処方法などであり、既存の尺度を本研究のために改変を加えたものである。分析では、どの状態で飼育者の介護負担感が高まるのかを調べるために、介護負担感尺度の得点の平均値および中間値で、介護負担感を高群と低群で分け、比較を行なった。

3. 倫理的配慮

本研究は、日本社会福祉学会研究倫理指針に則って行なわれた。

4. 研究結果

回答者は、8割以上が女性で、50代以上であった。介護負担感への対処方法については、積極的受容型である「意志の疎通を図り、犬の気持ちを尊重する」、「犬に対してやさしく真心を込めて接する」、「犬に頼まれたことは後回しにせずすぐに実行してあげる」がよく使われていた対処方法であった。一方、公的支援追求型である「犬の介護サービスを積極的に利用する」が最も使われていない対処方法であった。介護負担感と、対処方法の因子別の相関を見たところ、気分転換がよく出来ている人ほど、負担感が低かった。

介護負担感を高負担群と低負担群で比較したところ、高負担の飼育者は、イヌの介護支援サービスを利用し、心理的負担や身体的負担を感じ、イヌが生活基本動作の中で立ち上

がりや寝返りに介助を必要とし、イヌに認知症の症状が見られ、イヌの介護歴が短いという特徴があった。

5. 考 察

質問紙の回答者は女性が多く、人への介護と同様に、女性の方が高齢犬の介護を義務だと感じたり、介護に向いていると感じる人が多いと考えられる。高齢犬飼育者の介護負担感への対処方法では、積極的受容型がよく使われており、イヌと言葉が通じない分、イヌが訴えることをより感じ取ろうとする傾向があることが考えられる。反対に、公的支援追求型が最もできておらず、イヌの介護サービスの利用が一般に定着していないことが分かった。

高齢犬飼育者の介護負担感と対処方法の関係では、気分転換型の対処をよく使う人の負担感が軽く、低負担の人は時間の使い方や気持ちの切り替えがうまいことが示唆された。高齢犬についても、介護者は介護から一時的に逃れる時間を日常生活にうまく組み込むことが重要である。それが難しい場合でも、イヌの介護サービスの利用を念頭に置くことで、イヌの介護を一時でも他者に任せることが出来るという意識を持つことができ、気持ちを楽にすることが出来るだろう。

高齢犬飼育者の介護負担感を高群と低群で比較した結果、心理的負担を抱える飼育者は高負担であり、将来への不安や代替者不在、自身の力不足が負担感を高める要因と考えられる。立ち上がりの介助や寝返りの介助を必要とするイヌの飼育者も高負担であった。イヌが自力で立ち上がれない場合、生命活動の維持に必須の水分や食物摂取の度に飼育者がイヌに付き添わなければならない、そのことが飼育者の負担感を高めていると考えられる。イヌが寝返りを出来ない場合は、イヌに床ずれが出来やすくなり、飼育者が睡眠時間を削って床ずれ防止の介助を行なう必要があるため、高負担になると考えられる。この睡眠時間を削る行為は、介護負担感が高い飼育者が身体的負担を抱えている要因にも結び付く。体圧を分散させる介護用マットなどのイヌの介護用品の充実が、飼育者の負担感の軽減に役立つだろう。認知症を持つイヌの飼育者は高負担で、認知症によって排泄などイヌが今までできていたことが出来なくなると、飼育者が気に掛ける事案が増え、負担感が高まると考えられる。また、認知症によって飼育者とイヌの間で円滑な交流が減り、飼育者は過去のイヌとの関係を比較して寂しさを覚え、心理的負担に繋がる可能性も否めない。介護サービス利用では、利用者の方が高負担であった。飼育者の力だけでは介護の限界を感じたときに介護サービスを視野に入れるようになるため、既に利用している人は高負担であると考えられる。介護サービスの充実と介護サービスの早期利用が、飼育者の負担感を軽減する可能性は高い。介護歴では、介護歴が短い飼育者が高負担であり、介護歴が長い人よりも介護の技術と知識が少なく、介護に苦戦することが要因と考えられる。

今後は、どの介護方法が飼育者にもイヌにも合うのかを適切に見つけることのできる素早い支援提供が、負担感軽減の一助となるだろう。